

工芸品の生産組織を問い直す —工芸の専門化とむすびついた生産組織の研究手法の課題、 および生産組織の関係論的な研究手法に関する一考察—

三木 健裕*

Reconsidering the Approach to Organization of Craft Production:
Problems in Craft Specialization and its Relational Approach

Takehiro MIKI

これまで工芸品の生産組織の研究は、人類史において都市社会が初めて出現した西アジア地域の考古学を中心に、工芸の専門化、社会の複雑化のプロセスを解明すべく盛んになされてきた。本稿では第1に1980-90年代に体系化された、工芸の専門化とむすびついた生産組織のシステム論的な研究手法を整理し、その現状と課題を提示する。第2に前者の研究手法の問題点を解決しうる、生産組織の関係論的な研究手法を、アクター・ネットワーク理論、エンタングルメント理論といった思想とともに紹介する。さらに第3に、生産組織の関係論的な研究手法に実践共同体、T. インゴルドのスキル概念といった思想を導入することでそのアップデートを試みた上で、イラン南西部銅石器時代における土器生産組織への適用例を紹介する。

キーワード：工芸品の生産組織、工芸の専門化、アクター・ネットワーク理論、エンタングルメント理論、実践共同体

Organization of craft production has been studied to clarify the process of craft specialization and increasing social complexity especially in the archaeology of Western Asia. First, this paper reviews previous research on systems approaches to the organization of production connected to craft specialization, whose methodology was systematized in the 1980-90s. This review suggests four problems associated with the systems approach to the organization of production. Second, the relational approach to the organization of production is introduced as an alternative approach. Later, an explanation of Actor-Network-Theory and entanglement theory, which influenced this relational approach to the organization of production is given. Finally, by integrating community of practice and Tim Ingold's concept of skill into the relational approach to the organization of production, an update on this approach is presented via an example using of the organization of pottery production in the Chalcolithic of southwest Iran.

Key-words: organization of craft production, craft specialization, Actor-Network-Theory, entanglement theory, community of practice

1. はじめに

考古学では遺跡から出土する過去の工芸品を研究することで、その工芸品の生産組織（以下、生産組織と省略）を復元しようという試みが長い間行われてきた。ここで生産組織とは、どれくらいの人間が、どのように集まり組織され、どれだけのモノをどれだけの期間につくったのか、を指す。特に人類史上初めて都市社会が出現した西アジア地域の考古学的研究においては、生産組織は工芸の専門化、社会の複雑化というテーマに接近するための重要な研究材料とされてきた。本誌の創刊号においても都市出現期の土器生産を

テーマに、生産組織と専門化に関する特集が掲載された（西秋2000、小泉2000）。後述するように1980-90年代に工芸の専門化とむすびついた生産組織の研究は、生産組織、社会構造をシステムとして捉える研究手法・視座の中で体系化されてきた。この生産組織のシステム論的な研究手法は現在、どのような評価が与えられ、どのような問題が指摘されているのか？ 生産組織へのシステム論以外のアプローチは存在するのか？ そのアプローチはどのようなものなのか？ 本論文の目的はこれら生産組織の研究手法に関するリサーチクエスションに対する答えを提示することにある。

*ベルリン自由大学歴史文化学部古代近東考古学研究所博士課程

本論文は第2章において工芸の専門化、社会の複雑化の研究と深くむすびついた生産組織の研究手法とその理論的視座を整理し、今日の考古学におけるその課題を明確にする。生産組織のシステム論的な研究手法の問題点を踏まえ第3章では、生産組織を人間とモノの間の無数の関係性と捉える、生産組織の関係論的アプローチを紹介する。このアプローチに大きな影響をあたえたアクター・ネットワーク理論（ラトゥール 2019）、エンタングルメント理論（Hodder 2012）を説明し、関係論的アプローチの特徴を整理する。最後に本稿では生産組織の関係論的アプローチをさらにアップデートするため、生産組織の中で行われる学習、さらにその際に培われるスキルに着目してその議論を拡張する。新たに実践共同体（レイヴ・ウェンガー 1993）、T. インゴルド（Ingold）のスキル概念（Ingold 2000）を参照し、生産組織の関係論的アプローチと折衷主義的に統合させる。最後にイラン南西部銅石器時代における土器生産組織を対象として、関係論的な研究手法の一例を提示する。

2. 工芸の専門化・社会の複雑化とむすびついた生産組織の研究

最初に今日の考古学における生産組織の研究手法、理論的視座と密接にむすびついてきた工芸の専門化と社会の複雑化の課題を探るため、これらの先行研究を概観する。ここで端的に工芸の専門化とは、「ある人が自身で消費する以上のモノをつくること、あるいは自身が消費する以上のモノをつくることで生計を立てること」を指すとしておく。図1はグーグルNグラムビューワー（Google Ngram viewer）を用いて、「工芸の専門化（craft specialization）」という言葉が過去100年の書籍の中で使用された割合を示したものである。「Google Books」に保有された書籍のデジタルデータ上では、1920年代以前はわずかしか確

認されていない。1950年代から徐々に増加していき1990年代後半にピークに達する。だがその後2000年代以降は減少した。この減少は後に概観するように、工芸の専門化の研究手法に対する批判的意見が増加したことが一因として考えられる。本章では研究史を遡り、特に1990年代から2000年代以降の生産組織と工芸の専門化の研究手法への批判的主張を確認していくことで、その問題の所在を探る。

工芸の専門化研究は1950年代に遡る。マルクス主義的立場から都市の起源を探求したG. チャイルド（Childe）が中心となり、社会変化と生産組織の関係、すなわち専門工人の有無に関心が向けられるようになった（Childe 1950, 1951; 西秋 2000: 2; 下釜 2017）。また北米の文化人類学ではこれとほぼ同時期に、L. ホワイト（White）が中心となり新進化主義の潮流が生まれた（Steward 1955; White 1959; Sahlins and Service 1960; Service 1962; Fried 1967; 小泉 2013）。新進化主義は主に民族誌を拠り所にして社会類型（バンド社会、部族社会、首長制社会など）の発展段階モデルを提示した。またそのシステム論的な視座は、プロセス考古学だけでなく、社会変化と生産組織を結びつける工芸の専門化の研究手法の発展に大きな役割を果たした。

1970-1980年代になると、工芸の専門化、生産組織それ自体が研究の対象となる。R. エヴァンズ（Evans）、P. ライス（Rice）をはじめとした考古学者によって、システムとしての生産組織という観点から工芸の専門化が分析されるようになった（Evans 1978; Rice 1981）。彼らはシステム論的な視座から工芸の専門化とは何かを定義し、考古学的証拠からどのように工芸の専門化にアプローチできるかを具体的に論じた。さらにシステムとしての生産組織を分析する上で有効な定性的・定量的変数の一覧が、主として北米の人類学的考古学者によって提案されていった（Peacock 1982; Brumfiel and Earle 1987）。E. ブリュムフィー



図1 過去100年に出版されたデジタル書籍中における「工芸の専門化（craft specialization）」という用語の出現頻度（Google Ngram viewerを用いて作成）

ル (Brumfiel) と T. アール (Earle) が提案した変数、例えば生産者と消費者の関係 (独立か従属か)、生産の頻度 (非常勤か常勤か)、生産の規模などはこのような視座を代表している。先述した新進化主義的な立場から考古学者たちは、システムとしての生産組織は民族誌に基づいた生産類型 (production type) に分類でき、例えば世帯生産から工房生産へ、という発展段階モデルを適用できると考えるようになった。それと同時に社会の複雑化が進むにつれて工芸の専門化も進展するのか、両者の相関の解明が試みられた。この流れの中でブリュムフィールとアールはエリートによる従属専門工人の管理・支援が工芸の専門化に重要な役割を果たしたという、専門化発展における政治主因説を強調した (Brumfiel and Earle 1987)。

1990 年代における工芸の専門化とむすびついた生産組織の研究

ここでは 1990 年代から 2000 年代まで工芸の専門化について論じてきた 2 人の考古学者、J. クラーク (Clark) と C. コスティン (Costin) を取り上げる。クラークは W. パリー (Parry) とともに、工芸の専門化と社会の複雑化は相関しているという前提に対する疑問から、53 の社会を対象に工芸の専門化と社会の複雑化の統計的な相関を分析した (Clark and Parry 1990)。この分析にあたりクラークは工芸の専門化を「譲渡可能な恒久財を非扶養者 (nondependent) の消費のために生産することである (Clark and Parry 1990: 297; 西秋 2000: 3)」と広く定義した。この分析の結果、1) 生産頻度 (非常勤/常勤) は社会の複雑化と相関すること、2) 専門工人の数は共同体の規模と相関すること、3) 従属専門は社会複雑性の度合いが単純な社会とも相関することが明らかとなった。特に第 3 の点はブリュムフィールとアールの専門化発展の政治主因説と整合的である。

クラークとパリーの研究のすぐのち、コスティンは工芸の専門化を研究する上での方法論に関する論文を執筆した (Costin 1991)¹⁾。彼女は専門化の通文化的な比較をおこなうためには、工芸の専門化の用語や定義を統一する必要があると指摘した。コスティンによる工芸の専門化の定義は、クラークとパリーの定義より狭義である、すなわち「専門化とは分業による規則的かつ恒常的な、そして組織化されている場合もある生産システムである。そこでは生産者は生計の少なくとも一部を世帯構成員外との交易関係に依存し、一方で消費者は自ら生産しない物品の入手を彼らに依存している (Costin 1991: 4; 西秋 2000: 3)」。コスティンは、クラークとパリーの定義ではあらゆる社会に専門化が存在することになると批判する。西秋も指摘するようにクラークらの定義と大きく異なるのは、生産

者と消費者の間の依存関係が定義の中に埋め込まれている点である。

コスティンはまた工芸の専門化および生産組織を記載する上での 4 つの変数 (生産コンテクスト、生産密度、生産規模、生産頻度) を提案し、その変数に基づいた 8 つの専門化類型を提案した。ここで注目したいのは、各変数は数直線上の 2 つの極値の間で変動するパラメーターであると彼女が考えた点である。例えば生産コンテクストはエリートによる支援の度合いを示す変数と定義され、そのパラメーターは独立専門と従属専門という 2 つの極値の間を変動すると設定された。同様に生産頻度は非常勤専門と常勤専門という 2 つの極値の間を変動すると設定された。

1990 年代における工芸専門化とむすびついた生産組織研究の問題点

コスティンによって提案された生産組織および工芸の専門化の研究手法は、その後の生産組織、工芸の専門化研究のスタンダードとなった。さらに彼女の研究手法は 2001 年と 2005 年に彼女自身の手でアップデートされてもいる (Costin 2001, 2005)。しかしながら、2000 年代以降になるとこの研究手法の問題点が指摘され始めた。ここでは彼女の研究手法に対して既に 1990 年代においてなされていた、クラークによる批判を紹介する (Clark 1995)。クラークはコスティンが提示した生産組織と専門化の研究手法の 4 つの問題点、すなわち 1) システム論的な性格、2) 各変数の設定時における問題、3) 先史時代におけるモノの価値の解釈、そして 4) 理論的背景の欠落を指摘する。以下にこれら 4 つの問題を詳細に説明する。

第 1 にクラークは、コスティンが専門化の定義の中に生産者と消費者の間の相互依存を含め、工芸の専門化を狭く定義したために、専門/非専門の間の境界線に関する問題が生まれたと論じる。いったい専門的な生産組織と非専門的な生産組織の間の境界線はどこにあるのか? この境界線は実際のところ曖昧である。クラークはこの問題の根源が、システム、あるいは明確に閉じた枠組みとして生産組織を捉え、それに境界線を与えた点にあると指摘する。

第 2 にクラークは、コスティンが工芸の専門化と結びついた生産組織を分類するために用いた各変数の性格を批判する。コスティンは生産コンテクストという変数において独立専門、従属専門は同一軸上の極値であると設定したが、彼はこの両者の違いは度合いではなく、分類上のものであると主張した。そのため生産コンテクストという変数は数直線上で度合いとして単純に表現できるものではないと批判した。

第 3 の問題点はコスティンが先史時代の生産組織を説明・分類する際に前提としている、モノの価値に関

するものである。彼女が前提するモノの価値は、需要と供給のバランスを前提する市場経済に由来している。クラークはこの前提は、考古学者が市場経済的でない先史時代における工芸生産でのモノの価値を解釈する際に障害になると主張する。のちにクラークはこの問題点を追求すべく、モノの価値に関する理論的検討を行った (Clark 2007)。その結果、彼はモノの価値は人間が投下した労働量で決まる、という古典派経済学の立場から、モノの価値は消費者の主観的な満足度で決まるという新古典派経済学の立場へ向かっていった。これによって彼はモノの価値を探る上では、生産組織の研究よりも考古資料が使用されたコンテキストの分析が重要であると結論づけた。これに対しコスティンはクラークが生産組織の研究を過小評価し過ぎていると批判している (Costin 2007)。

最後に、クラークはコスティンの生産組織を記載する方法論には、なぜ工芸の専門化が進化したのかを説明する理論的な基盤が欠落していると批判した。専門化の原動力として余剰と余暇に着目した、チャイルドによる工芸の専門化の起源に関する議論と異なり、彼女の方法論は工芸の専門化、生産組織をいかに記載するかを重視したものである。これでは未知の考古学的データに既存の枠組みを適用してその生産組織を記載するばかりで、なぜ工芸の専門化が進化したのか、という問いに答える新しい理論が生まれてこないという。

クラークと同様に早い段階から考古学でおこなわれている工芸の専門化と生産組織の研究手法に批判的であった考古学者として、R. トリンガム (Tringham) が挙げられる (Tringham 1996)。彼女は1990年代における工芸の専門化と生産組織の研究手法は、政体、階級、社会構造のようなマクロスケールでしか社会的エンティティを議論しておらず、エリート、専門工人のような個人は「顔のない棒人間 (faceless blob)」に還元されていると指摘した。彼女は工芸の専門化や社会変化をマクロスケールとミクロスケール (例えばジェンダー、年齢、そして世帯内での役割など) の双方の視点から考察する必要性を主張した。

2000-2010年代における工芸専門化とむすびついた生産組織研究の問題

第2章の冒頭で述べたように特に2000年代後半から、生産組織と工芸の専門化の研究手法に批判的な意見が増え始める。クラークやトリンガムからの批判を受け、コスティンは2000年代に生産組織の研究手法における自身の方法論的枠組みをアップデートしてきた (Costin 2001, 2005)。彼女によるアップデートはシステムとして生産組織を捉えたうえで、その変数 (構成要素) を数多く細分し検討していく方向へ進んだ (例えば工人、生産手段、組織と生産における社会

的關係、物品、流通の關係、そして消費者など) (Costin 2001)。また複数の異なる工芸生産が互いに關係し合い、相互に影響を与えていた可能性に着目した「複数の工芸生産を横断する全体論的アプローチ (multicraft and holistic studies of production)」を紹介している (Costin 2005: 1041)。これに類似したアプローチはA. ブリスバート (Brysbaert) や島田泉とU. ワグナー (Wagner) も提案しており (Brysbaert 2007; Shimada and Wagner 2007)、さらなる発展が期待される。

その一方、コスティンの提示した生産組織および工芸の専門化を記載する研究手法が広まり世界各地の考古学的証拠に適用された結果、その枠組みに綺麗に当てはまらない多くの反例が現れることとなった。C. シノーポリ (Sinopoli) は豊富な文献資料のあるヴィジャヤナガラ王国期の南インドにおける工芸生産の事例研究から、コスティンによる変数をパラメーターとみる手法に対する反例を提示している (Sinopoli 2003)。J. メノン (Menon) は鉄の冶金の民族誌的記録を考古学的記録に対置させることで、情報の乏しい考古学的証拠から実際の工芸生産およびその組織を復元する難しさと限界を指摘する (Menon 2008)。

反例を提示して生産組織と工芸の専門化の研究手法を批判する研究者がいる一方で、条件付きでその妥当性を認める研究者もいる。D. アーノルド (Arnold) は1965年から1997年までのメキシコ、ユカタン半島ティクルのマヤ族による土器づくり共同体の変化に関する民族考古学的調査を用い、コスティンの生産組織の研究手法を検証した (Arnold 2008)。彼はコスティンの研究手法でもちいられたパラメーターを、30年間に起こった社会変化および土器の生産と流通の「進化」の分析をとおして評価を試みた。この評価の結果、アーノルドは土器生産の進化を議論する上でコスティンのパラメーターが有効であることを認めたが、パラメーターの再検討などさらなる洗練が必要であることも指摘している。インド、タミル・ナドゥ州の鉄器時代における生産組織の研究を行なったG. ケリー (Kelly) は、シノーポリの主張を支持し、考古学的証拠から生産組織を復元する難しさを指摘してコスティンの研究手法を批判しているが (Kelly 2009)、生産組織研究の出発点としては有効であることを認めている。

このような状況の中で『複雑な社会における工芸の専門化を再考する』と題する論文集がZ. フルービー (Hruby) とR. フラッド (Flad) によって出版され、その導入章において当時の工芸の専門化研究の傾向が議論された (Flad and Hruby 2007)。彼らの議論には1990年代以降に体系化されてきた生産組織と工芸の専門化の研究手法に対する疑問とその解決を試みる様子が

みて取れる。第1に彼らはコスティンとクラークで食い違う専門化の定義の折衷案を提案した。コスティンによる狭い意味での定義を「生産者専門 (producer specialization)」、クラークによる広い意味での定義を「生産品専門 (product specialization)」と呼び、彼らはこの2つの定義が質的に異なっているのではなく、程度の差であると主張した。だがクラークが指摘した第2の問題点同様、程度の差と捉えることは工芸の専門化を単純化する恐れがある。

フラッドとフルービーは第2に、生産組織ならびに工芸の専門化のシステム論的な研究手法の問題を克服する上で、実践理論の有効性を指摘する。実践理論における実践とは、食べる、歩くといった日常生活において特に意識されずに営まれていく慣習的行為である。個々人の実践は自身が所属する社会構造の中に位置付けられ、特定のかたちとなって営まれる。実践理論では日常生活での実践の反復をとおして、実践を行う行為者とその背後にある社会構造が再帰的に影響を与え合い、互いを再生産していくと考えられる。実践理論はシステム (構造) を前提としながらも、個人とシステム間の再帰的關係を重視して、システム論的な視座の克服を試みる。フラッドとフルービーは一例として、儀礼的パフォーマンスで使われる特別なモノの専門的な工芸生産の実践をとおして、ある専門工人 (行為者) が自身の名声を高め、完成品の価値は上がり、さらに完成品が使われる儀礼的コンテクスト (構造) は一層重要となる、という再帰的な関係を提示した。ここでのフラッドとフルービーによる実践理論の専門化研究への援用例は、生産システムよりも、完成品が使われるコンテクストにおける意味と価値の分析の重要性を強調する。その結果、クラーク同様、生産より消費の研究を重視していくことになる。

2010年代においても生産組織と工芸の専門化のシステム論的な研究手法への批判的意見は続いている。M. カイパー (Kuijpers) は専門的な生産組織を定義・議論する上でコスティンのように生産者と消費者の依存関係を重視した結果、常勤で、群を抜く逸品を製作できる熟達した専門工人 (specialist) のみが研究の対象になってしまっており、そうでない工人たちと彼らの製作物は工芸の専門化の研究において軽視されていると批判する (Kuijpers 2017, 2018)。そこで彼はスキル (技能) の点から専門工人と非専門工人の間の境界線を再考している。「専門工人になるにはどのくらいのスキルが必要とされるのか? 専門工人と非専門工人の間の実際の境界線は、その用語が示すほど明確ではない (すなわち、砂山のパラドックス [sorites paradox]²⁾ である) (Kuijpers 2018: 2)。」カイパーはこの専門工人の境界線に関する問題を解決するには、物質的専門化 (material specialization) (工人の

スキル) と経済的専門化 (economic specialization) (労働の分化、あるいは生産者と消費者の間の依存関係を区別するべきだと提案する。カイパーはスキル (物質的専門化)、生産頻度 (非常勤/常勤)、そして経済的専門化は相関する、という安易な前提に警鐘を鳴らす。

K. デュイスターマート (Duistermaat) は土器生産組織の研究史を概観していく中で、1970-1990年代における生産組織と工芸の専門化の研究手法を批判している (Duistermaat 2016)。彼女は1970-1980年代におけるブリュムフィールドとアールを代表とした、生産組織の手がかりとなる変数をもとに生産類型を判断する研究手法を「型式 (類型) 学的アプローチ (typological approach)」と位置付ける。彼女は生産類型とはラベルに過ぎず、むしろ実際の生産組織がいかに複雑で、多面的で、多層的であるかを見えにくくしていると批判している。また生産類型は変数と変数の間に普遍的な結びつきがあると前提しているが、こういった前提も慎重に検討し直すべきだと指摘する。例えば非常勤 (生産頻度)、家内生産 (生産場所)、そして小規模生産 (生産規模) といった変数は、民族誌をもとに結びつけられてきたが、それらの間の関係性は実際必ずしも普遍的ではない。彼女は同様に生産類型と社会類型の間に普遍的な相関がある、と安易に想定することも批判する。

デュイスターマートは1990年代のコスティンによる変数をパラメーター化する研究手法に関しても、その変数の一つ、生産コンテクストというパラメーターの極値 (独立専門、従属専門) は複数の側面を混同して結びつけていると指摘する (Duistermaat 2016)。たとえば従属専門という極値における生産者と消費者の関係 (従属)、工芸品の種類と質 (奢侈品)、そして工芸品へのアクセス (エリートによる管理) といった側面の混同が挙げられる。このため彼女はコスティンのパラメーターがきわめて要素還元的 (reductive) であると結論づける。彼女はこのように先行研究を概観したのち、1970年代から1990年代において提示されてきた生産組織の研究手法の上記の問題点を克服するため、人間とモノの間関係性に着目する生産組織の関係論的アプローチ (relational approach) を提案する。筆者は彼女による生産組織への関係論的な研究手法を肯定的に評価し、第3章でそれを詳しく述べる。ただ第3章へ移る前に、工芸の専門化の研究に大きな影響を与えた新進化主義への批判を紹介、かつ工芸の専門化・社会の複雑化のシステム論的な研究手法の限界と有効性を再考し、本章の内容を要約する。

新進化主義への批判

2000年代以降、新進化主義、社会進化理論、ある

いは社会の複雑化という1990年代まで工芸の専門化の研究手法と強く結びついてきた観念に対しても、批判的な意見が多く挙げられるようになった。N. ヨッフィー (Yoffee) は新進化主義を、近現代社会の民族誌に基づいてモデル化された抽象的社会類型 (例えば首長制社会) の発展段階を提示しているに過ぎないと批判する (Yoffee 2005)。そしてその発展段階に追従することは未知の古代社会を既知の類型に当てはめて確認するだけであり、なぜ社会が変化するのか、を説明する理論的研究を前進させることはないという。ヨッフィーは新進化主義には批判的であるが、同時に、ポストプロセス学派の影響下で進められた個別主義 (particularist) 的な歴史探求に満足してはいない。彼は文明社会を通文化的に比較し、社会進化学論を前進させるためには、単なる社会類型の比較ではなく、古代の文明社会が歩んできた累積的な歴史、「進化的軌道 (evolutionary trajectory)」を考慮して検討していくべきであると主張する。さらにヨッフィーより一歩進んで、T. ポーキタット (Pauketat) は社会進化学論におけるシステム論的、要素還元的手法である「組み立てブロック式 (building block)」アプローチを批判している (Pauketat 2007)。組み立てブロック式アプローチでは「世帯や共同体を静的で斉一的な組織単位、すなわち社会組織内の構成要素の典型的形態である組み立てブロックとして認識する」 (Pauketat 2007: 45)。彼は組み立てブロック式アプローチは世帯や共同体が持つ流動的でダイナミックな性格を軽視していると批判する。

ヨッフィーやポーキタットに代表されるように、過去20年間の中で新進化主義の方法が明確に否定されたのは確かではあるが、人類史規模での社会進化学論、あるいは都市化、国家形成の起源を探る大きな試みは現代の考古学において重要な主題であり続けており、システム論的な研究手法は採用され続けている。現代の (主として英語圏の) 考古学者たちの間における社会進化学論への関心はK. W. キンティグ (Kintigh) らによってリストアップされた、考古学における25の「グランド・チャレンジ」からも明らかである (Kintigh et al. 2014)。社会進化学論の研究手法はシステム論的な研究手法を維持しつつ、前述のヨッフィーやM. E. スミス (Smith) によって編纂された『複雑社会の比較考古学』によってアップデートされている (Smith 2012)。システム論的な研究手法に則った社会進化学論への関心は、このようなアップデートをおこない、文化・社会の発展段階を前提する新進化主義的立場を廃することで、通文化的、あるいは長期にわたるタイムスケールで人類史を論じる際には未だに有効である。

小結：工芸の専門化とむすびついた生産組織の研究手法の4つの問題と解決案

以上、1950年代から2010年代にかけての生産組織、工芸の専門化のシステム論的な研究手法とその問題点を整理してきた。これらの問題点は4種類に大別可能であり、基本的にはクラークによって提案された4つの批判に基づいている。以下これらの問題点とその考えられうる解決策を簡潔に述べる。

第1の問題点は生産者と消費者の間の相互依存関係を専門化の前提とし、生産組織を閉じたシステムとして捉える、システム論的視座である。このために専門/非専門の境界線はどこにあるのか、という問題が生じる。筆者はこの問題の一つの解決策としてデュイスターマートに従い、第3章にて生産組織の関係論的アプローチを紹介する。だが生産組織、工芸の専門化研究におけるシステム論的研究手法が研究の出発点として、あるいは分析概念として有効であることを否定する意図はない。第2の問題は、生産組織の分析に用いる変数を設定する要素還元的手法に内在する。各変数は実際、さらにいくつかの別々の変数に細分可能であり、またパラメーターとして単純に扱うには問題がある。この問題に関するシンプルな解決策は変数をできるだけ多く追加し、再考することである。第3の問題点は需要と供給のバランスをア・プリオリに前提する資本主義的価値観でモノの価値を議論する点である。この問題の解決策の一つは、生産の研究と消費の研究の割合のバランスを保つことである。第4の問題点として、生産組織、工芸の専門化のシステム論的な研究手法は新進化主義同様、既存の分類枠組みに従って過去の生産組織を記載、分類するのみであり、それゆえに工芸生産の新しい側面を見つることができず、工芸生産の新しい理論を生み出す余地がない、という点がある。解決策の一つとして社会進化学論において累積的な歴史に着目したヨッフィーの取り組みのように、システム論的な視座を維持したままその研究手法を洗練させることが挙げられる。

3. 生産組織研究における関係論的な研究手法

筆者は前章で工芸の専門化とむすびついた生産組織のシステム論的な研究手法を概観し、4つの問題点を提示した。本章ではデュイスターマートがそれに対する代案として掲げた、生産組織の関係論的アプローチを紹介する。関係論的アプローチとは、生産組織にかかわる人間とモノの間のさまざまな関係性に着目し、それらをできるだけ詳細に辿ることをとおして生産組織を考察することを指す。この研究手法はこれまでの生産組織、工芸の専門化の研究手法のシステム論的かつ要素還元的な側面を解決することができる点に意義

がある。以下彼女の関係論的な研究手法の基礎となった B. ラトゥール (Latour) のアクター・ネットワーク理論 (ラトゥール 2019)、I. ホダー (Hodder) のエンタングルメント理論 (Hodder 2012) を紹介し、生産組織の関係論的な研究手法とは何であるかをより詳細に説明する。

アクター・ネットワーク理論

アクター・ネットワーク理論にはその名称の末尾に「理論」が付いているものの、通常の理論とは異なる社会的・歴史的事象が起こった社会的原因や仮説を提供するための理論ではない。そうではなく、アクター・ネットワーク理論とは社会的なもの (the social) を調査する方法に関する理論である (ラトゥール 2019)。ラトゥールによれば、社会的なものとは人間と非人間を含む無数のアクターからなる連関である。このアクター・ネットワーク理論の最大の功績は、社会的なものを論じる際、人間／非人間という二元論を留保し、モノにアクターとしての役割を付与した点である。以下、ラトゥールによる従来の社会学への批判に従いながら、アクター・ネットワーク理論を詳細に論じていく。

ラトゥールは従来の社会学では「中間項 (intermediary)」、換言すれば「意味や力をそのまま移送するもの (ラトゥール 2019: 74)」を用いて社会現象を説明してきたと述べる。ラトゥールはこの中間項を、その内部の実態は不明ながら、社会的説明という結果を外部へ提供するブラックボックスであると批判する。例えば「凶悪犯罪の増加という現象は現代の社会にその原因がある」と説明した場合、「現代の社会」がブラックボックスである中間項に該当する。ラトゥールはこのように自身が問題視する中間項の代わりに「媒介子 (mediators)」、すなわち「自らが運ぶとされる意味や要素を変換し、翻訳し、ねじり、手直しする (ラトゥール 2019: 74)」ものとしてのアクターの連関に着目する。先の例はラトゥールに従えば、現代社会に凶悪犯罪の増加の原因を求めて説明を終えるのではなく、「現代の社会」にみられる人間と非人間からなるアクター (媒介子) の無数の関係性を辿り直し、「凶悪犯罪の増加」を考察するべきである、ということになる。ラトゥールにとって媒介子としてのアクターの連関を理解することは、これまでブラックボックスとして深く追求されなかった「社会」という概念を考え直すこと、すなわち社会的なものを組み直す上で重要である。久保明教はこの試みを「『社会』なるものを『原理的に還元不可能な諸要素の原理的に制限のない結びつき』として捉え直す試み (久保 2019: 133)」であると説明する。

さらに、ラトゥールによる社会的なものを組み直す

上で中間項の代わりに媒介子を用いるべきだという主張は、グローバルなものとローカルなものという二元論の克服へと導く。彼は「グローバルなものをローカル化する (localizing the global)」と「ローカルなものを分散させ直す (globalizing the local)」を提案する。グローバルなものとローカルなもの、マクロとミクロ、そして集団と一成員の間には階層的上下関係は存在しない。アクター・ネットワーク理論では、グローバルなものとローカルなものはアクター・ネットワーク内において同じ地位に立って存在している。換言すれば、ポーキタットが批判するブロック組み立て式アプローチのように世帯など最小単位を積み上げてより大きな社会組織を構築し考察するのではなく、アクター・ネットワーク理論では「社会的領域を完全にフラットにしておこうとしなければならない (ラトゥール 2019: 331)」。アクター・ネットワーク理論ではグローバルなものもローカルなものも、人間と非人間からなるアクター・ネットワークの中でアクターに分解される。以上がアクター・ネットワーク理論の概要である。デュイスターマートは生産組織をモノづくりに関わる人間と非人間からなるアクター・ネットワークと捉え、生産組織の関係論的な研究手法を提唱する。

エンタングルメント理論

次にアクター・ネットワーク理論と同様に生産組織の関係論的な研究手法に影響を与えたエンタングルメント理論を紹介し、アクター・ネットワーク理論との相違点を指摘する。アクター・ネットワーク理論は特に 2000 年代後半以降、多くの考古学的研究に影響を与え、そのうちのいくつかは対称性考古学 (symmetrical archaeology) と呼ばれている (Shanks 2007; Witmore 2007; Webmoor and Witmore 2008; Olsen 2010; Olsen et al. 2012; Hamilakis and Jones 2017; Harris and Cipolla 2017)。対称性考古学では人間／非人間、文化／自然という二元論を留保し、考古学における人間とモノの間の関係の対称性に着目する。その一方、ラトゥールのアクター・ネットワーク理論を考古学へ批判的に応用した研究の一つがホダーによるエンタングルメント (entanglement: 絡み合い) 理論である (Hodder 2012)。ホダーのエンタングルメント理論の基本概念の一つは「正の依存 (dependence)」と「負の依存 (dependency)」である。正の依存とは人とモノの間の中での、一方が他方に恩恵を与える関係であり、対して負の依存とは一方が他方を束縛していく関係である。ホダーは多くの事例を用いて人間-モノ、モノ-モノ、そしてモノ-人間の間での正と負の依存関係を説明する。そしてエンタングルメントとは人間とモノの間における正と負の依存関係が絡み

合う弁証法であると定義する (Hodder 2012: 89)。

ホダーはエンタングルメントのいくつかの重要な特徴を説明している。第1に、人間とモノはあるエンタングルメントの中において、生まれてから死ぬまでの時間の流れ (temporality) が異なる。第2に、人間はあるモノの存在を次第に当たり前のものと考えようになり、そのエンタングルメント内においてそのモノの存在を忘れてしまう。第3に、人間は以上で述べたエンタングルメントの特徴と経路依存性 (path dependence) のため、エンタングルメントの中において罫に陥り (entrapped)、そこから抜け出しにくくなる。経路依存性とは時間が経つにつれてある経路 (選択) から別の経路へ替えるコストが増加していくため、経路を替えることがますます難しくなっていく、という考えである。第4点はエンタングルメントには中心と周縁が存在し、その中心に位置する支配集団が権力を有している点である。第5点はエンタングルメントの内部では自身と異なるモノの時間の流れを人間が忘れてしまうため、人間にとってモノは不確実性と偶然性で満ちた存在と化す、という点である。

ホダーのエンタングルメント理論はアクター・ネットワーク理論から、エンタングルメントに境界線を設定しないこと (open-endedness)、人間とモノの関係性への着目、そして非還元主義というアイデアにおいて影響を受けている。しかしながらアクター・ネットワーク理論への批判を通して、彼は自身の理論を考古学研究に特化させようと試みている。第1に文化/自然、人間/非人間、精神/肉体、そして主体/客体の二項対立を排除するアクター・ネットワーク理論の関係論的視座は極端であると批判する。ホダーは第2に、ラトゥールは人間と非人間の間を対称的であると考えたため、モノの物質性を十分に考慮していないと批判する。第3にアクター・ネットワーク理論ではアクター間の対称性が極端に強調されるあまり、権力の問題を積極的に論じきれない点を批判する。以上の批判を通して、ホダーはエンタングルメント理論において、人間とモノの間には対称的ではなく非対称的な関係が存在すると主張する。さらにホダーは人間とモノの間を関係性を重視したエンタングルメント理論から、これまで生産組織や社会組織の研究手法が用いてきたシステムについて説明を試みる。彼はシステムとは静的で閉じた枠組みではなく、エンタングルメント内において人間とモノの間の正と負の依存関係がその周囲より動的にもつれ合い収束した部分であると主張する。

ホダーはエンタングルメントにおける正と負の依存関係を視覚化する手段として、「タングルグラム (tanglegram)」と呼ばれる模式図を提案する。チャタルホユック (Çatalhöyük) 遺跡における粘土のエン

タングルメントの例 (図2) では、彼はモノをできるだけ多くの節点 (node) として提示し、遺跡から得られた考古学的証拠に基づいてそれらの関係を線で表し、つなぎ合わせる。彼はモノとモノの間の依存関係を矢印で表現する。彼は人間と関係するモノを四角形で表現している。彼自身が指摘するように、タングルグラムはあくまでエンタングルメントのほんの一部を視覚化しているだけであり、現実世界をこのように図化すると無限に複雑になるのは明らかである。このほか彼は、タングルグラムとともに出土地点といった空間情報やモノのシェーン・オペラトワール、ライフヒストリー、型式の時間的変遷といった時間情報を表現しようと試みている。以下で詳しく述べるように、デュイスターマートは生産組織をエンタングルメントであるとも捉え、生産組織における人間とモノの様々な関係性を表現する手段としてタングルグラムを採用する。

デュイスターマートによる

土器生産組織の関係論的な研究手法

以上が生産組織の関係論的な研究手法の基礎となったラトゥールのアクター・ネットワーク理論とホダーのエンタングルメント理論の概要である。デュイスターマートは人間とモノの間の無数の関係性に着目するこれらの思想を土器生産組織の研究に応用している (Duistermaat 2016)。すなわち、彼女は土器生産組織をシステムではなく、人間とモノの間の無数の関係性からなるアクター・ネットワーク、またはエンタングルメントに対応すると考えた。彼女は土器生産組織におけるエンタングルメントを辿る上で4つの戦略、1) 物質的特質における関係性をたどる (図3)、2) シェーン・オペラトワールにおける関係性をたどる (図4)、3) 土器のライフヒストリーにおける関係性をたどる、4) エンタングルメントに時空間情報を与える、を提案する。このように土器の属性、土器の生産組織の関係性をたどる上でタングルグラムを用いる長所は、図3、4のように異種混濁な情報をたくさん、自由に加えることができる点にある。これにより考古学者がこれまで見落としていた人間とモノの間の関係性に目を向けさせてくれる。

このようにデュイスターマートはアクター・ネットワーク理論、エンタングルメント理論を土器生産組織のための有効な研究手法へと具象化している。しかしながら、彼女はアクター・ネットワーク理論とエンタングルメント理論の間の決定的な違いである、人間とモノの間の関係の対称性の有無に関する論争には触れていない。ホダーのエンタングルメント理論の有効性、および人間とモノの間の関係が対称的か否か、は未だ議論が続いている (Pollock et al. 2014; Harman 2014;

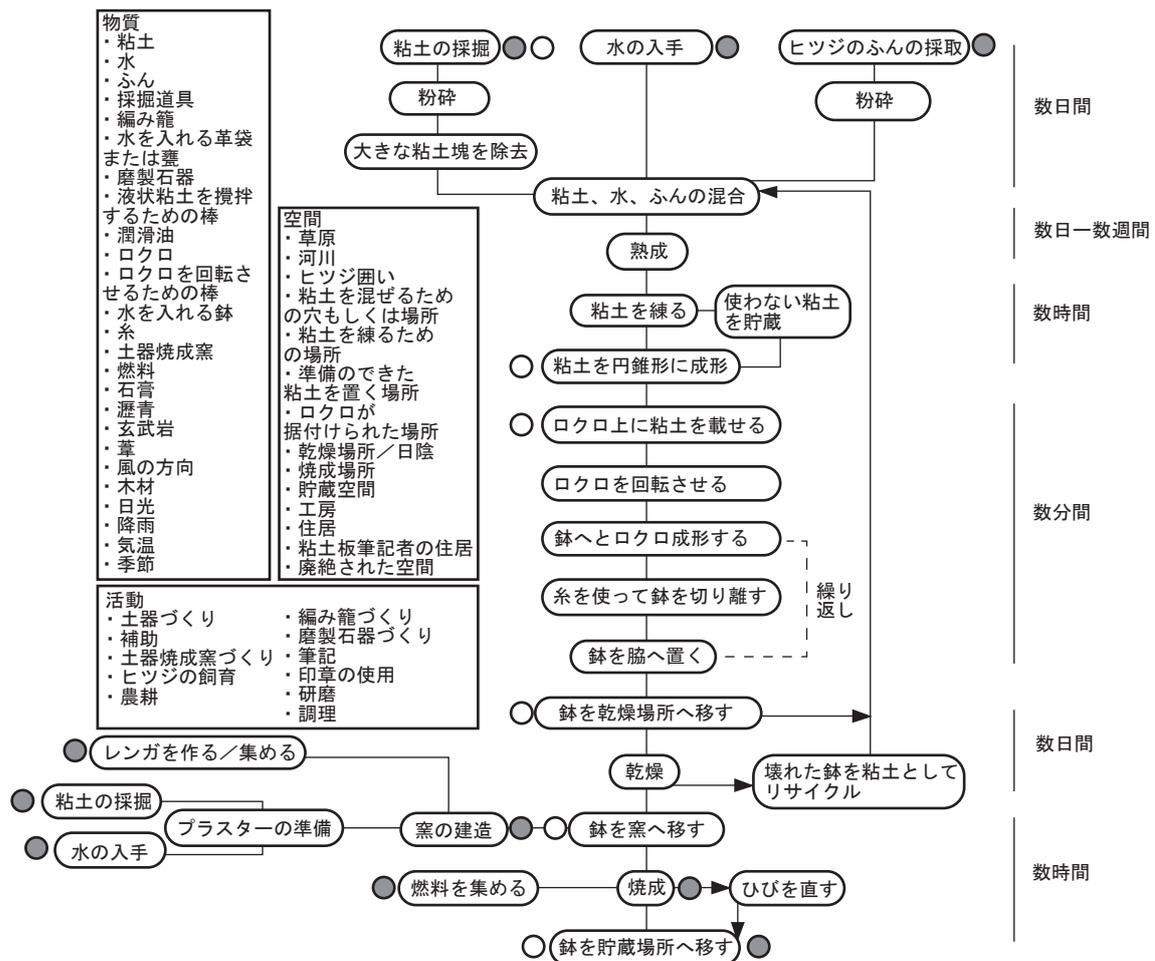


図4 中期アッシリア時代の浅鉢づくりのシェーン・オペラトワール、およびそれと関係する物質、空間、活動を併記したタングルグラム。灰色の丸印は外部の者とのコミュニケーションが必要な状況、白色の丸印は作業の分担と補助者が存在した可能性が高い状況を示す。(Duistermaat 2016: Fig. 9. 2 を翻訳)

るスキルという視点に着目する。本稿ではスキルとは、実践共同体や生産組織の中で見習いが獲得・維持していく、ある実践のテクニク (technique) に伴う巧拙であると定義する。筆者は社会人類学者インゴルドによるスキルの人類学的研究、および考古学者カイパースによって提示された考古資料に現れるスキルの痕跡に関する研究を紹介する。まずインゴルドは熟達した工人が発揮するスキルには以下の5つの側面があると説明する (Ingold 2000)³⁾。

第1の側面は、熟達した実践においては行為者と行為者が用いる道具、そしてその行為が行われる環境の間には境界線がなくなる、すなわち、三者は関係論的に結びついており、そのような実践によって完成品のかたちが生成されるという点である。第2の側面では、スキルは行為者の身体技法など肉体的、物理的な属性だけに参与しているのではなく、行為者の精神的属性、そして行為者を取り巻く環境と渾然一体となって参与している点が指摘される。第3の側面は熟達した実践における行為者の感覚の重要性である。熟達した

実践において行為者の五感スキルに大きく関係している。例えば土器に彩文を描く際、熟達者は器面の感触を筆先から感じ取り、綺麗な線を描けるよう注意する。第4の側面では熟達した実践における感覚はどのように修練できるのかを考察する。インゴルドは実践を修練する場、換言すれば実践共同体に参加することが五感の向上につながると主張する。最後の第5の側面は熟達した実践によって作られたモノのかたちについてである。インゴルドは、熟達した工人の頭の中には作られるモノに関する範型 (メンタル・テンプレート、行為者が作ろうと意図したモノのかたち) が前もって存在し、モノのかたちは工人の頭の中から外へ向けて表現されたものである、という考えを否定する。代わりに彼は、モノづくりは熟達した工人、道具、そして彼らを取り巻く環境を含む多くのアクターが関係論的に参与しており、それらが総体となってモノのかたちが生成されると主張する (Ingold 2000; Ingold 2017)。筆者はスキルを伴う熟達した実践における人間、モノ、環境の関係性を強調する以

上の彼の思想は、実践共同体と同様に人間とモノの間の関係性という点で生産組織の関係論的な研究手法と共鳴していることを指摘したい。

インゴルドはスキルに関する観念的な説明を提示するにとどまった。それに対し第2章の終わりでも紹介したカイパースは、考古資料からこのスキルを実証的に研究する方法を探求している (Kuijpers 2017)。カイパースはこれまで考古資料のスキルを研究する際、その資料が保存状態の良い優品に偏り、そのスキルが美学的・主観的に解釈されてきたため、またスキル(技能)とテクニク(どんな手順を踏んで作られたのか)を混同してきたため、考古学におけるスキル研究は停滞していたと指摘する。そこでカイパースは考古資料からスキルを分析するには、技能の巧拙の客観的、定量的評価が必要であると主張する。またスキルそのものの研究だけでなく、当時の工人、非工人を含んだ共同体の中でスキルがどのように認識されたか、そして従来の工芸の専門化研究で蓄積されてきたスキル、生産頻度(非常勤/常勤)、経済的専門化(生産者と消費者の相互依存関係)の相関を慎重に考慮することも、スキルの考古学的研究に必要であると主張する。

考古学ではこれまで多くの研究が考古資料から先史時代の製作スキル、そして更にそのスキルが培われる場である実践共同体を解明しようと試みてきた。これら先行研究はJ. ミナール (Minar)、P. クラウン (Crown)、そして W. ヴェントリッヒ (Wendrich) らによってまとめられており (Minar and Crown 2001; Crown 2014; Wendrich 2013)、西アジア考古学においてはカストロ・ゲスナー (Castro Gessner)、シュターツマン (Starzmann) らによるハラフ期のフストゥクル・ホユック (Fıstıklı Höyük) 遺跡における彩文土器と石器の製作スキルならびに実践共同体にアプローチした事例研究がみられる (Castro Gessner 2008; Starzmann 2013)。例えばカストロ・ゲスナーはハラフ彩文土器に見られるミス(線の重複、はみ出し、揺らぎなど)をもとに施文スキルを定量的に評価する手法を提示し分析を行い、フストゥクル・ホユック遺跡とテル・サビ・アビヤド (Tell Sabi Abyad) 遺跡における高い施文スキルと低い施文スキルの割合を導き出した上で、両遺跡における彩文土器づくり実践共同体の違いを考察している (Castro Gessner 2008)。

これら考古学における実践共同体に関する議論では、徒弟制に関する民族考古学的研究が多くの手がかりを与えてきた (Bunzel 1929; Balfet 1965; Friedlich 1970; DeBoer 1990; Gosselain 1998, 2008; David and Cramer 2001; Wallaert-Pêtre 2001; Arnold 2008; Wallaert 2013)。例えば、考古学資料からは読み取ることの難しい、徒弟制に関する以下のような問

題提起を考える上で民族誌は有効である。

- 1) 何歳から徒弟制が始まり、学習の各段階(雑用から実践へ)へ移行していくのか?
- 2) どのように(直接的指導/間接的観察、模倣など)、そして何(動作、抽象的知識など)を見習いは実践共同体で学習するのか?
- 3) 教える側と見習いの間にはどのような関係が存在するのか(ジェンダーの違い、年齢の違い、血縁関係など)?
- 4) 徒弟制は生計を立てるための学習以外に、どのような役割を果たすのか(アイデンティティの形成など)?

これらの民族考古学的研究を引用する中で、考古学者たちは徒弟制、実践共同体の違いが考古学的証拠に違いとして現れるかを探ってきた。例えば模倣を強制して厳格に実践を伝達させる保守的な徒弟制を採用する実践共同体と、間違いや試行錯誤に寛容で開放的な徒弟制を採用する実践共同体では、物質文化に違いが見られるのではないかとクラウンは H. ウォラート=ペトル (Wallaert-Pêtre) によるカメルーンの陶工たちの徒弟制に関する民族考古学的研究の成果 (Wallaert-Pêtre 2001) を参考に、アメリカ合衆国南西部のミンプレス (Mimbres) 土器伝統とホホカム (Hohokam) 土器伝統の間の徒弟制の違いを議論した (Crown 2001)。しかしながら、筆者はウォラート=ペトルの徒弟制の二元論的分類(開放的/保守的)はあくまで予察的なものに過ぎないと指摘したい。加えて筆者は徒弟制と考古学的証拠の間の相関を決定論的に論じることには慎重になるべきであると考え。筆者は先史時代の徒弟制および実践共同体に関しては、考古資料の分析のほか、他のコンテクストを示すデータも加えて議論・解釈するべきであると主張する。

実践共同体、インゴルドのスキル概念と生産組織の関係論的な研究手法

以上、生産組織の関係論的な研究手法をアップデートするため、生産組織内においてどのように学習がおこなわれたのか、どのようにスキルが培われたのか、という観点を追加し、実践共同体、インゴルドのスキル概念と考古学における適用事例を紹介してきた。最後にこれらの概念が生産組織の関係論的アプローチにおける人間とモノの間の関係の対称性/非対称性の議論にどのように貢献するかを考察し、三者の折衷を試みる。第1にある実践共同体内における人間、モノ、スキルの関係性を模式的に表現した(図5:1)この図ではあるモノの範型は実践共同体(環境も含む)の成員間で共有されている。実践共同体の周辺に位置する見習いは道具、環境そしてモノの範型と上手く応答

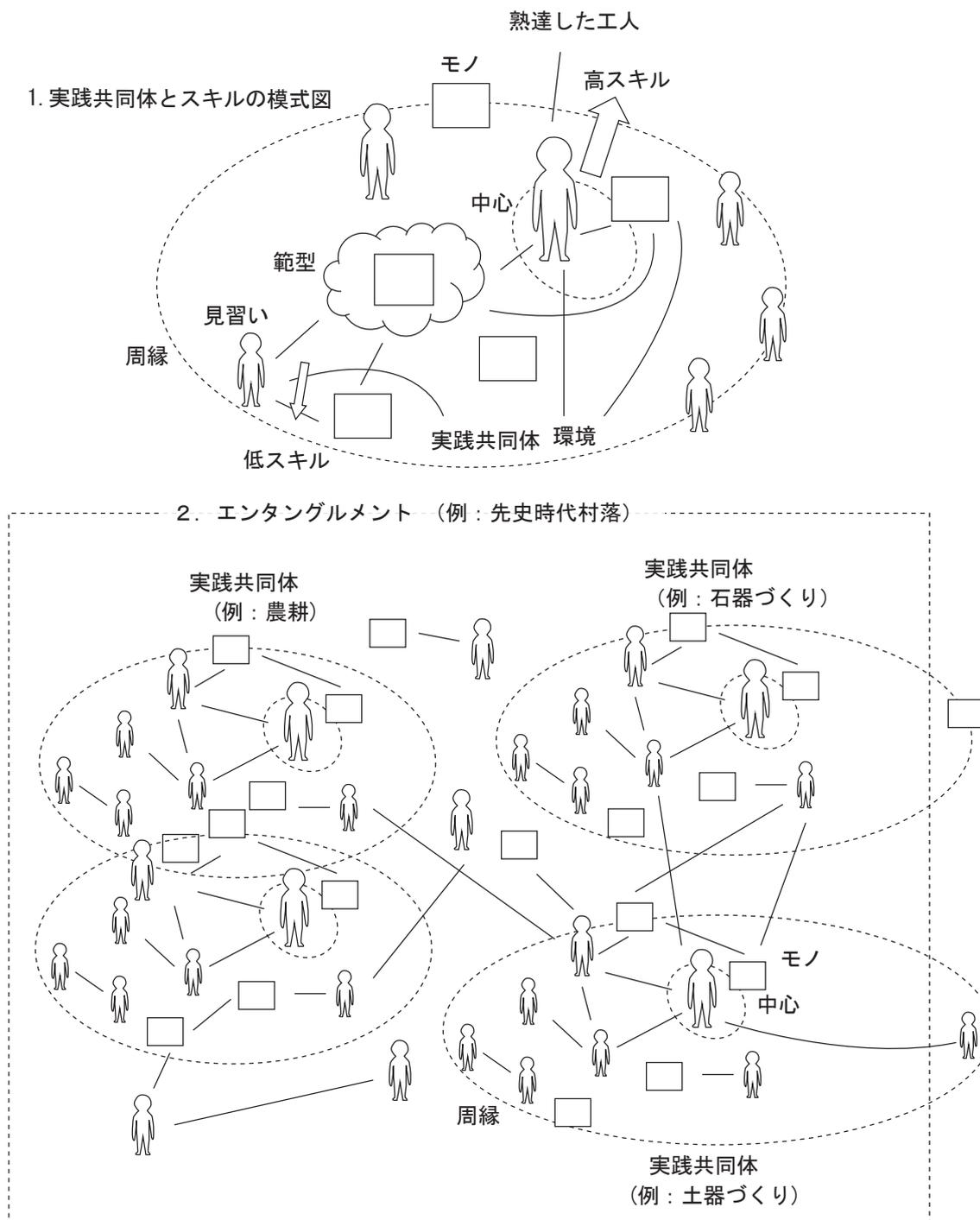


図5 実践共同体とスキルの模式図（1：上）とエンタングルメントと実践共同体の模式図（2：下）

できず、完成品であるモノに認められるスキルは低い。その一方、実践共同体の中心に位置する熟達した工人はそれらとうまく応答しており、高いスキルが認められる逸品を生み出す。実践共同体では「正統的周辺参加」という用語が示すように、見習いと熟達した工人の間にはスキルという点で非対称的な関係が明確に存在する。

さらに、この人間と人間の間の非対称的な関係を認める実践共同体を人間とモノの関係性にまで拡張し

た場合、筆者は関係の対称性を主張するアクター・ネットワーク理論よりもむしろ、その非対称性にも着目するエンタングルメント理論と親和性が高いと主張する。この一例としてある先史時代村落におけるエンタングルメント、およびそれと併存する各実践共同体を描いた模式図を提示する（図5：2）。この村落には土器づくり、石器づくり、農耕といった様々な実践共同体が存在し、人間と人間の間、人間とモノの間に非対称的な関係が認められ、中心と周辺を形成する。これ

ら実践共同体やエンタングルメントは明確に分離しているのではなく、ゆるやかに重複し、関係し合っている。このような複数の実践共同体の集合体はウェンガーが提唱する「実践の付置 (constellations of practices) (Wenger 1998: 127; 松本 2013; Roddick and Stahl 2016)」に相当する。筆者はこの模式図では人間やモノを顔のない人間や四角として表現したが、実際には様々な年齢、ジェンダー、文化的背景を持った人々や、様々な非人間 (発掘で見つかり報告されたモノ、まだ報告されていないモノ、まだ見つからないモノ、残存しなかったモノ、動物、植物など) からなる。

小結：生産組織における関係論的な研究手法と その発展可能性

本稿の第3章では生産組織における関係論的な研究手法を紹介し、この研究手法に大きな影響を与えたアクター・ネットワーク理論、エンタングルメント理論を説明した。生産組織における関係論的な研究手法では生産組織を閉じたシステムではなく、人間と人間の間、人間とモノの間、モノとモノの間の無数の関係性とみなす。アクター・ネットワーク理論では人間とモノの間の関係の対称性を主張する一方で、エンタングルメント理論では人間とモノの間には非対称的な依存関係が存在すると反論する。筆者はこの議論に貢献し、生産組織の関係論的アプローチをアップデートすべく、第4章において実践共同体、インゴルドのスキル概念を紹介し、三者を折衷主義的に統合させようと試みた。生産組織の中での学習、生産組織の中で修練されるスキルという観点を導入した結果、本論文では生産組織における人間と人間、人間とモノの間の関係性に関しては、対称性より非対称性が優勢であると論じた。しかし筆者はこのような関係性の性格はア・プリオリに措定されるべきものではなく、詳細な分析を通して議論・解釈されるべきであると考えている。最後に簡潔ではあるが、筆者が研究対象とするイラン南西部銅石器時代における土器づくり共同体を関係論アプローチから眺め直し、新たな視点から生産組織を論じてみたい。

5. イラン南西部銅石器時代における 土器づくり共同体

紀元前5千年紀から約1000年間、イラン南西部ファールス地方マルヴ・ダシュト (Marv Dasht) 平原はバクーン (Bakun) 期と呼ばれる時期に当たり、精緻な文様が施された彩文土器が製作された。メソポタミアのウバイド期、イラン南西部フーズスターン (Khuzestan) 州のシアアナ中-後期と並行するこ

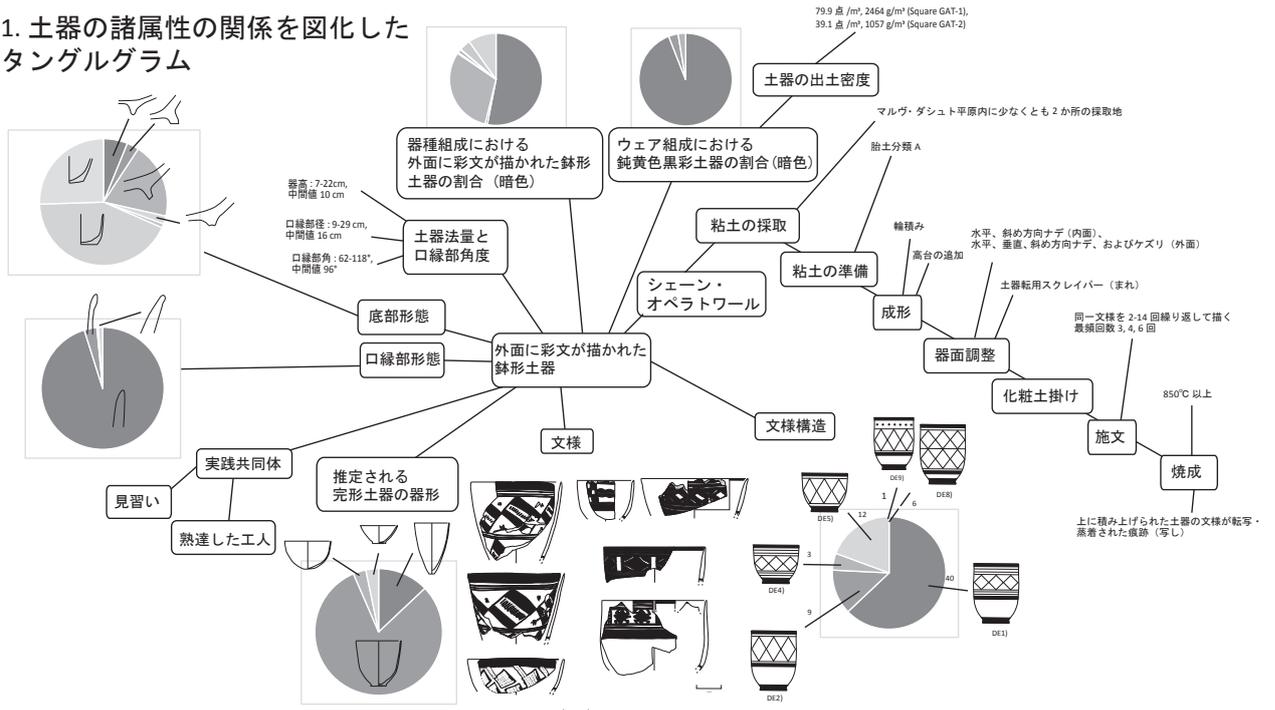
の時期は、当該地域にはじめて高温焼成施設である土器焼成窯が受容され、鈍黄色黒彩土器 (black-on-buff ware) が作られた時期に当たる。この土器生産に関しては、工芸の専門化が進展していたという主張が先行研究によってなされており、当該時期において社会の複雑化が進行していたという主張とセットになって提示された (Alizadeh 1988, 2006; Sumner 1994)。専門化を支持する研究者のうち A. アリザーデ (Alizadeh) は、エリートによる管理の下、従属専門工人在工房地区にて彩文土器の製作に従事していたと主張した (Alizadeh 1988)。それとは対照的に J. フレーザー (Fraser) は、土器生産は必ずしもエリートに管理された活動ではないと反論し、拡大世帯内において世帯レベルで製作された可能性を示唆した (Fraser 2008)。これら先行研究の主張は対立しているものの、どちらも工芸の専門化研究、社会の複雑化研究をささえてきたシステム論的な視座に立脚している。筆者はここで専門/非専門、独立/従属、世帯/工房というシステム論的な視座が展開してきた二元論を保留し、代案として紹介した関係論的な研究手法から、バクーン期における土器生産組織を考察する。

筆者は関係性としての生産組織を図化するアプローチとして、ホダーの提唱するタングルグラムを用いた事例を提示する。デュイスターマートと同様に筆者はタングルグラムを改良し、土器の諸属性の間の関係性を図化した第1のタングルグラム (図6:1)、および村落内での人間、モノ、各実践共同体の間の関係性を図化した第2のタングルグラム (図6:2) を提示する。以下、タル・イ・ギャップ (Tall-i Gap) 遺跡を例に、タングルグラムの図をみてみよう。

第1のタングルグラム (図6:1) では鈍黄色黒彩土器 (ウェア) における外面に彩文が描かれた鉢形土器 (器形) という属性をタングルグラムの中心に据え、その属性と関係する他の属性を放射状につなげている。このように特定の属性を中心に据えて、その隣接する諸属性との関係を提示するネットワークは「エゴ・ネットワーク (ego network)」と呼ばれる (Hodder and Mol 2015: 1070)。第2のタングルグラム (図7:2) では、タル・イ・ギャップ遺跡での発掘成果 (江上・曾野編 1962) を元に、村落内における人間 (見習い、熟達者、実践に参加していない者など様々な人々を含む)、モノ (発掘で見つかったモノ、見つからなかった有機物など残存しないモノ)、そのモノづくりや生業に関与した実践共同体を推定し、それらの間の関係性を提示した。村落の中で多くのアクターと関係するモノ (粘土など)、そうでないモノ (石製容器など) が視覚的に明らかになる。

このタングルグラムを用いた手法の長所は、システム論的な視座に囚われることなく、生産組織において

1. 土器の諸属性の関係を図化した タングルグラム



2. 村落における人間、モノ、実践共同体 の関係を図化したタングルグラム

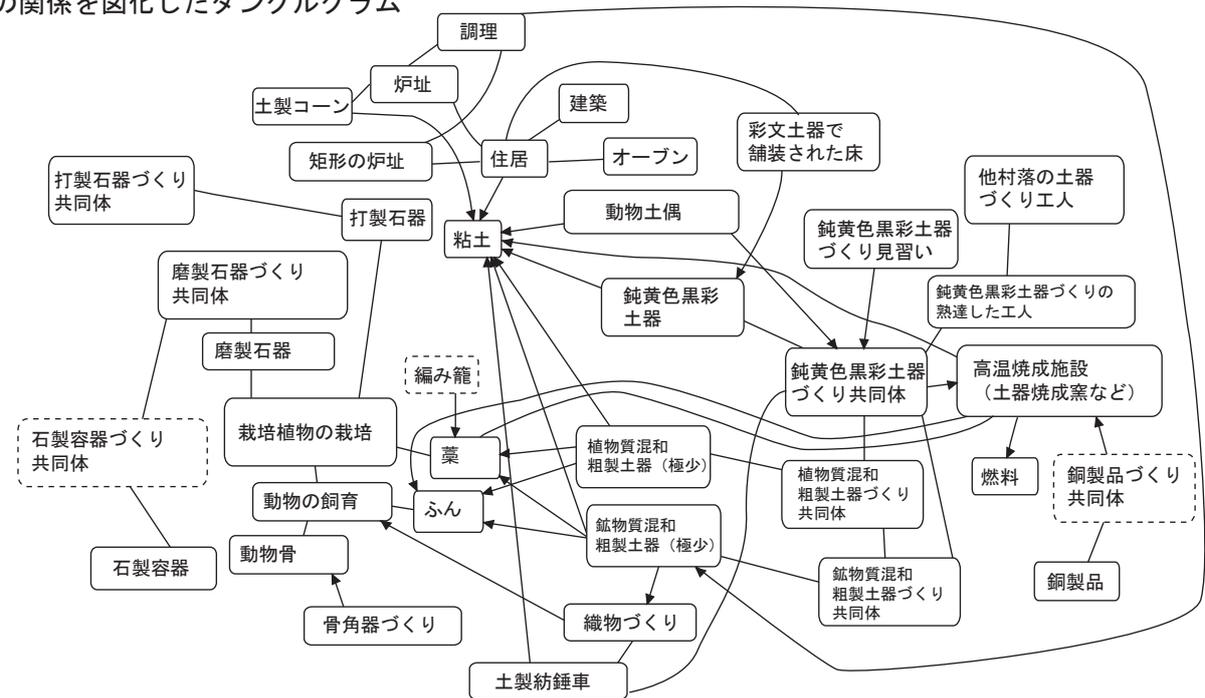


図6 タル・イ・ギャブ遺跡における、鈍黄色黒彩土器（ウェア）における外面に彩文が描かれた鉢形土器とその他の諸属性の関係を図化したタングルグラム（1：上）、村落における人間、モノ、実践共同体の間の関係を図化したタングルグラム（2：下）（筆者作成）

考古学者に見逃されていた関係性に目を向けさせてくれる点である。遺跡ごと、地域ごと、時期ごとに丹念にこのような無数の関係性を読み取り、遺跡間、地域間ならびに通時的に関係性のパターン（人間とあるモノの関係性が強まる、弱まる、あるいは新たなモノと

の関係性が生まれ、より複雑化するなど）を比較することで、生産組織、ひいては村落社会の通時的変化や地域差を新たな角度から論じることができる。一方この手法の主な短所は、タングルグラムに登場する属性、アクター、およびこれらアクター間の共時性はあ

くまで考古学者が恣意的に選択したに過ぎない点である。今回は紙幅の都合上、バクーン期における彩文土器づくり実践共同体と村落の歴史の変遷、特に人間がどのように彩文土器への依存関係を深め、その依存関係が村落にどのような変化を引き起こしたのか、に関しては提示できなかった (Miki in prep)。稿を改めて論じたい。

6. おわりに

本論文では第1に1950年代から2010年代における、工芸の専門化とむすびついて議論されてきた生産組織の研究史を概観した。特に1980年代から1990年代に体系化された生産組織および工芸の専門化の研究手法は、1) 生産組織を静的で閉じた構造とみなすシステム論的手法、2) 生産組織を変数/構成要素に分解する要素還元的手法、3) モノの価値に関する資本主義的解釈、そして4) 生産組織の記載に特化しており、新しい理論を創出する機会がない点に問題を抱える。

本論文では、上記の問題点を抱える生産組織と工芸の専門化のシステム論的な研究手法への代案の一つとして、デュイスターマートが提案する生産組織の関係論的な研究手法を提示した。この関係論的な研究手法は、組織を人間と非人間の間の対称的な関係性の連関として考えるアクター・ネットワーク理論、それに対して人間とモノの間の非対称的な関係性を主張するホダのエンタングルメント理論から大きな影響を受けている。筆者はこの両理論の重要な相違点、関係の対称性/非対称性を議論し、関係論的な研究手法をアップデートするため、学習における成員間(熟達した工人、見習い)の関係性の重要性を指摘する実践共同体、およびスキルは人間、モノ、環境、そしてモノの範型の間で創発する関係性の中で生成されると説くインゴルドのスキル概念を参照した。最後に、生産組織の関係論的な研究手法に両概念を折衷主義的に統合し、生産組織における人間とモノの間の無数の関係性は非対称性に偏りつつ、実践共同体、スキルの生成・維持、そしてエンタングルメントに関与している、とする生産組織の関係論的アプローチの改良版を新たに提示し、イラン南西部銅石器時代の土器づくりを対象にその一例を紹介した。

しかし筆者は生産組織、工芸の専門化研究のシステム論的な研究手法を時代遅れだと批判するつもりも、それに対する生産組織の関係論的な研究手法やエンタングルメント理論の優越性を主張するつもりもない。筆者は双方の研究手法・視座は、一方が他方を克服するような関係ではないと主張したい。どちらの研究手法にも長所・短所がある。通文化的、長期的視野(マ

クロススケール)で生産組織の歴史の変遷を論じる際はシステム論的研究手法・視座が未だに有効である。一方、局地的、短期的視野(ミクロスケール)から生産組織に着目し、チャタルホック遺跡のようにあらゆるデータを高精度で取得できれば、関係性に目を向けて当時の生産組織を議論し、新たな解釈を提示できる。もちろん生産組織の研究における両視座はシステム論的/関係論的、のように二項対立的に扱われるべきでなく、第3、第4の視座も現れうる。将来もしそのような視座が現れた場合、生産組織をめぐる考古学的研究において、解釈が存在論的にさらに多元的となり、より一層の研究の進展がみられると期待する。

謝辞

本稿は筆者がベルリン自由大学に提出した博士論文『Pottery Making and the Communities During the 5th Millennium BCE in Fars Province, Southwest Iran』の第3章である理論的枠組みを加筆修正し、改めたものである。本稿の執筆にあたってはベルリン自由大学のラインハルト・ベルンバック教授から多くの助言を賜った。また東京大学総合研究博物館の西秋良宏教授には今回の論文を執筆する上での大きな刺激とアドバイスを頂いた。古代オリエント博物館の下釜和也氏からも有益なコメントを頂いた。本研究はDAAD奨学金による研究成果の一部である。ここに記して感謝申し上げる。

註

- 1) ほぼ同時期にC. プール (Pool) も工芸の専門化の方法論に関する論文を提示した (Pool 1992)。
- 2) ある人が砂山から一回につき一粒の砂を持ち去る、ということは何百回、何千回も繰り返したとき、砂山と非-砂山の境界はどこにあるのか? このパラドックスは曖昧な用語(砂山や専門工人)を定量的に分析しようと試みる際に生じる。
- 3) 近年のスキルに対するインゴルドの思想はIngold 2018に要約されている。

参考文献

- Alizadeh, A. 1988 Socioeconomic Complexity in Southwestern Iran During the Fifth and Fourth Millennia B.C.: The Evidence from Tall-e Bakun A. *Iran* 26: 17-34.
- Alizadeh, A. 2006 *The Origins of State Organizations in Prehistoric Highland Fars, Southern Iran: Excavations at Tall-e Bakun*. The University of Chicago Oriental Institute Publications, Vol. 128. Chicago, Oriental Institute of the University of Chicago.
- Arnold, D. 2008 *Social Change and the Evolution of Ceramic Production and Distribution in a Maya Community*. Boulder, University Press of Colorado.
- Balfet, H. 1965 Ethnographical Observations in North Africa and Archaeological Interpretation. In F. R. Matson (ed.), *Ceramics and Man*, 161-177. Chicago, Aldine.
- Brumfiel, E. and T. Earle 1987 Specialization, Exchange, and Complex Societies: An Introduction. In E. Brumfiel and T. Earle (eds.), *Specialization, Exchange, and Complex Societies*, 1-9. Cambridge, Cambridge University Press.

- Brysbaert, A. 2007 Cross-Craft and Cross-Cultural Interactions During the Aegean and Eastern Mediterranean Late Bronze Age. In S. Antoniadou and A. Pace (eds.), *Mediterranean Crossroads*, 325–359. Athens, Pierides Foundation.
- Bunzel, R. L. 1929 *The Pueblo Potter: A Study in Creative Imagination in Primitive Art*. New York, Dover.
- Castro Gessner, G. 2008 *The Technology of Learning: Painting Practices of Early Mesopotamian Communities of the 6th Millennium B.C.* PhD thesis, Department of Anthropology Binghamton University, Ann Arbor, ProQuest UMI.
- Childe, G. V. 1950 The Urban Revolution. *The Town Planning Review* 21/1: 3–17.
- Childe, G. V. 1951 *Social Evolution*. Cleveland, World Publishing Co.
- Clark, J. 1995 Craft Specialization as an Archaeological Category. *Research in Economic Anthropology* 16: 267–294.
- Clark, J. 2007 In Craft Specialization’s Penumbra: Things, Persons, Action, Value, and Surplus. In Z. X. Hruby and R. K. Flad (eds.), *Rethinking Craft Specialization in Complex Societies: Archaeological Analyses of the Social Meaning of Production*, 20–35. Archaeological Papers of the American Anthropological Association, Vol. 17/1. Arlington, VA, American Anthropological Association.
- Clark, J. and W. J. Parry 1990 Craft Specialization and Cultural Complexity. *Research in Economic Anthropology* 12: 289–346.
- Costin, C. 1991 Craft Specialization: Issues in Defining, Documenting, and Explaining the Organization of Production. *Archaeological Method and Theory* 3: 1–56.
- Costin, C. 2001 Craft Production Systems. In G. M. Feinman and D. T. Price (eds.), *Archaeology at the Millennium: A Sourcebook*, 273–327. New York, Kluwer Academic/Plenum Press.
- Costin, C. 2005 The Study of Craft Production. In H. D. G. Maschner and C. Chippindale (eds.), *Handbook of Archaeological Methods*, 1032–1105. Lanham, Altamira Press.
- Costin, C. 2007 Thinking about Production: Phenomenological Classification and Lexical Semantics. In Z. X. Hruby and R. K. Flad (eds.), *Rethinking Craft Specialization in Complex Societies: Archaeological Analyses of the Social Meaning of Production*, 143–162. Archaeological Papers of the American Anthropological Association, Vol. 17/1. Arlington, VA, American Anthropological Association.
- Crown, P. L. 2001 Learning to Make Pottery in the Prehispanic American Southwest. *Journal of Anthropological Research* 57: 451–470.
- Crown, P. L. 2014 The Archaeology of Crafts Learning: Becoming a Potter in the Puebloan Southwest. *The Annual Review of Anthropology* 43: 71–88.
- David, N. and C. Kramer (eds.) 2001 *Ethnoarchaeology in Action*. Cambridge, Cambridge University Press.
- DeBoer, W. R. 1990 Interaction, Imitation, and Communication as Expressed in Style: The Ucayali Experience. In M. W. Conkey, and C. A. Hastorf (eds.), *The Uses of Style in Archaeology*, 82–104. Cambridge, Cambridge University Press.
- Duistermaat, K. 2016 The Organization of Pottery Production: Toward a Relational Approach. In A. Hunt (ed.), *The Oxford Handbook of Archaeological Ceramic Analysis*, 114–147. Oxford, Oxford University Press.
- Evans, R. 1978 Early Craft Specialization: An Example for the Balkan Chalcolithic. In C. L. Redman (ed.), *Social Archaeology: Beyond Subsistence and Dating*, 113–129. New York, Academic Press.
- Flad, R. K. and Z. X. Hruby 2007 “Specialized” Production in Archaeological Contexts: Rethinking Specialization, the Social Value of Products, and the Practice of Production. In Z. X. Hruby and R. K. Flad (eds.), *Rethinking Craft Specialization in Complex Societies: Archaeological Analyses of the Social Meaning of Production*, 1–19. Archaeological Papers of the American Anthropological Association, Vol. 17/1. Arlington, VA, American Anthropological Association.
- Fraser, J. A. 2008 An Alternate View of Complexity at Tall-e Bakun A. *Iran* 46: 1–19.
- Fried, M. H. 1967 *The Evolution of Political Society: An Essay in Political Anthropology*. New York, Random House.
- Friedrich, M. 1970 Design Structure and Social Interaction: Archaeological Implications of an Ethnographic Analysis. *American Antiquity* 35/3: 332–343.
- Gosselain, O. P. 1998 Social and Technical Identity in a Clay Crystal Ball. In M. T. Stark (ed.), *The Archaeology of Social Boundaries*, 78–106. Washington DC, Smithsonian Institution Press.
- Gosselain, O. P. 2008 Mother Bella Was Not a Bella: Inherited and Transformed Traditions in Southwestern Niger. In M. T. Stark, B. J. Bowser and L. Horne (eds.), *Cultural Transmission and Material Culture: Breaking Down Boundaries*, 150–177. Tucson, The University of Arizona Press.
- Hamilakis, Y. and A. M. Jones 2017 Archaeology and Assemblage. *Cambridge Archaeological Journal* 27/1: 77–84.
- Harman, G. 2014 Entanglement and Relation: A Response to Bruno Latour and Ian Hodder. *New Literary History* 45/1: 37–50.
- Harris, O. J. T. and C. N. Cipolla 2017 *Archaeological Theory in the New Millennium: Introducing Current Perspectives*. London, New York, Routledge.
- Hodder, I. 2012 *Entangled. An Archaeology of the Relationships between Humans and Things*. Chichester, Wiley-Blackwell.
- Hodder, I. 2014 The Entanglements of Humans and Things: A Long-Term View. *New Literary History* 45/1: 19–36.
- Hodder, I. 2016 *Studies in Human-Thing Entanglement*, Open Access.
- Hodder, I. 2018 *Where Are We Heading? The Evolution of Humans and Things*. New Haven, Yale University Press.
- Hodder, I. and A. Moll 2015 Network Analysis and Entanglement. *Journal of Archaeological Method*

- and *Theory* 23: 1066–1094.
- Hodder, I. and G. Lucas 2017 The Symmetries and Asymmetries of Human-Thing Relations: A Dialogue. *Archaeological Dialogues* 24/2: 119–137.
- Ingold, T. 2000 *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. New York, London, Routledge.
- Ingold, T. 2018 Five Questions of Skill. *Cultural Geography* 25/1: 159–163.
- Kelly, G. 2009 Craft Production and Technology During the Iron Age to Early Historic Transition at Kodumanal, Tamil Nadu. *Tamil Civilization* 23: 1–14.
- Kintigh, K. W., J. Altschul, M. C. Beaudry, R. D. Drennan, A. P. Kinzig, T. A. Kohler, F. W. Limp, H. D. G. Maschner, W. K. Michener, T. R. Pauketat, P. Peregrine, J. A. Sabloff, T. J. Wilkinson, H. T. Wright, and M. Zeder 2014 Grand Challenges for Archaeology. *American Antiquity* 79/1: 5–24.
- Kuijpers, M. H. G. 2017 *An Archaeology of Skill: Metalworking Skill and Material Specialization in Early Bronze Age Central Europe*. Routledge Studies in Archaeology, Vol. 29. New York, Routledge.
- Kuijpers, M. H. G. 2018 The Bronze Age, a World of Specialists? Metalworking from the Perspective of Skill and Material Specialization. *European Journal of Archaeology* 21/4: 550–571.
- Menon, J. 2008 Archaeological Problems with Specialization. *Studies in History* 24/1: 137–157.
- Miki, T. (in prep) *Pottery Making and the Communities During the 5th Millennium BCE in Fars Province, Southwest Iran*. PhD dissertation, Berlin, Free University of Berlin.
- Minar, J. and P. L. Crown 2001 Learning and Craft Production: An Introduction. *Journal of Anthropological Research* 57/4: 369–380.
- Olsen, B. 2010 *In Defense of Things: Archaeology and the Ontology of Objects*. Plymouth, Altamira Press.
- Olsen, B., M. Shanks, T. Webmoor, and C. Witmore 2012 *Archaeology: The Discipline of Things*. Berkeley, University of California Press.
- Pauketat, T. R. 2007 *Chiefdoms and Other Archaeological Delusions*. Lanham, Altamira Press.
- Peacock, D. P. S. 1982 *Pottery in the Roman World: An Ethnoarchaeological Approach*. London, New York, Longman
- Pollock, S., R. Bernbeck, C. Jauß, J. Greger, C. von Rügen and S. Schreiber 2014 Entangled Discussions: Talking with Ian Hodder About His Book Entangled. *Forum Kritische Archäologie* 3: 151–170.
- Pool, C. A. 1992 Integrating Ceramic Production and Distribution. In G. J. III Bey, and C. A. Pool (eds.), *Ceramic Production and Distribution. An Integrated Approach*, 275–313. Boulder, Westview Press.
- Rice, P. 1981 Evolution of Specialized Pottery Production: A Trial Model. *Current Anthropology* 22/3: 219–240.
- Roddick, A. P. and A. B. Stahl 2016 Introduction: Knowledge in Motion. In A. P. Roddick and A. B. Stahl (eds.), *Knowledge in Motion: Constellations of Learning across Time and Place*, 3–35. Amerind Series in Anthropology. Tucson, The University of Arizona Press.
- Sahlins, M. D. and E. R. Service (eds.) 1960 *Evolution and Culture*. Ann Arbor, The University of Michigan Press.
- Service, E. R. 1962 *Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective*. New York, Random House.
- Shanks, M. 2008 Symmetrical Archaeology. *World Archaeology* 39/4: 589–596.
- Shimada, I. and U. Wagner 2007 A Holistic Approach to Pre-Hispanic Craft Production. In J. M. Skibo, M. W. Graves and M. T. Stark (eds.), *Archaeological Anthropology. Perspectives on Method and Theory*, 163–197. Tucson, University of Arizona Press.
- Sinopoli, C. M. 2003 *The Political Economy of Craft Production: Crafting Empire in South India, C. 1350–1650*. New York, Cambridge Press.
- Smith, M. E. (ed.) 2012 *The Comparative Archaeology of Complex Societies*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Starzmann, M. T. 2013 Spontaneity and Habitus: Stone Tool Production in Communities of Practice at Fıstıklı Höyük. In O. Nieuwenhuys, R. Bernbeck, P. Akkermans and J. Rogasch (eds.), *Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia*, 161–170. Papers on Archaeology from The Leiden Museum of Antiquities Series. Turnhout, Brepols Publishers.
- Steward, J. H. 1955 *Theory of Culture Change: The Methodology of Multilinear Evolution*. Urbana, University of Illinois Press.
- Sumner, W. M. 1994 The Evolution of Tribal Society in Southern Zagros Mountains, Iran. In G. Stein and M. Rothman (eds.), *Chiefdoms and Early States in the Near East: The Organizational Dynamics of Complexity*, 47–65. Madison, Prehistory Press.
- Tringham, R. 1996 But Gordon, Where Are the People? Some Comments on the Topic of Craft Specialization and Social Evolution. In B. Wailes (ed.), *Craft Specialization and Social Evolution: In Memory of V. Gordon Childe*, 233–239. University Museum Monograph, Vol. 93. Philadelphia, University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- Wallaert, H. 2013 Apprenticeship and the Confirmation of Social Boundaries. In W. Wendrich (ed.), *Archaeology and Apprenticeship: Body Knowledge, Identity, and Communities of Practice*, 20–42. Tucson, The University of Arizona Press.
- Wallaert-Pêtre, H. 2001 Learning How to Make the Right Pots: Apprenticeship Strategies and Material Culture: A Case Study in Handmade Pottery from Cameroon. *Journal of Anthropological Research* 57: 471–493.
- Webmoor, T. and C. Witmore 2008 Things Are Us! A Commentary on Human/Things Relations under the Banner of a ‘Social’ Archaeology. *Norwegian Archaeological Review* 41/1: 53–70.
- Wendrich, W. 2013 Archaeology and Apprenticeship: Body Knowledge, Identity, and Communities of Practice. In W. Wendrich (ed.), *Archaeology and Apprenticeship: Body Knowledge, Identity, and Communities of Practice*, 1–19. Tucson, The University of Arizona Press.
- Wenger, E. 1998 *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. Cambridge, Cambridge University Press.

- White, L. A. 1959 *The Evolution of Culture: The Development of Civilization to the Fall of Rome*. New York, McGraw-Hill.
- Witmore, C. 2007 Symmetrical Archaeology: Excerpts of a Manifesto. *World Archaeology* 39/4: 546-562.
- Yoffee, N. 2005 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge, Cambridge University Press.
- インゴルド、T. 2017『メイキング 人類学・考古学・芸術・建築』左右社。
- 江上波夫・曾野寿彦（編）1962『マルヴ・ダシュトII タルイ-ギャブの発掘：1959』東京大学東洋文化研究所。
- 久保明教 2019『ブルーノ・ラトゥールの取説—アクターネットワーク理論から存在様態探求へ—』月曜社。
- 小泉龍人 2000「古代メソポタミアの土器生産—製作技術と工房立地から見た専門化—」『西アジア考古学』1号 11-31頁。
- 小泉龍人 2013「都市論再考—古代西アジアの都市化議論を検証する—」『ラーフィダーン』34巻 83-116頁。
- 下釜和也 2017「西アジアにおける専門化と社会変化：論点と展望」『WASEDA RILAS JOURNAL』5号 490-492頁。
- 西秋良宏 2000「工芸の専門化と社会の複雑化—西アジア古代都市出現期の土器生産—」『西アジア考古学』1号 1-10頁。
- 松本雄一 2013「実践共同体における学習と習熟化」『日本労働研究雑誌』55巻10号 15-26頁。
- ラトゥール、B. 2019『社会的なものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局。
- レイヴ、J・ウェンガー、E. 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書。